

流音について
—RとLの言語学—

小林 正憲

四天王寺国際仏教大学紀要

第40号

2005年9月

(抜刷)

流音について —RとLの言語学—

小 林 正 憲

(平成17年3月24日 提出)

流音とは r と l の文字で表される言語音声である。この音声は我々日本人にとって特異な点があるように感じられることがある。第一に、日本語の音韻体系にはただ一つの流音（ラ行子音）しかないのに対して、日本人が学習する外国の言語の多くは複数の流音をもっていて、日本人の外国語学習における一つの試金石になることがある。第二に、日本語のラ行音は日本語の音韻体系において著しい非対称性をもっている。即ち、他の種類の音声とは対照的に、固有の日本語においては、ラ行音は語頭に立つことができないという制約が存在している。これらの特異性は何に由来するのであろうか。

世界には、日本語のように、流音を一つしかもたない言語と複数の（典型的には二つの）流音をもつ言語が並存している。それらの地理的分布は明確な対照を見せている。単一流音言語群はユーラシア大陸の東端にベルト状に伸びてアメリカ南北大陸に広がっている。一方、複流音言語群は北アフリカからアラビアを経てユーラシア大陸の大部分を覆っている。このような対立は何に由来するのであろうか。

流音は恒常性と変異性という相矛盾した二面性をもっている。日本語は、その歴史において、漢語や近代西洋語の異質な流音の影響に曝されながらも、本来のラ行子音の音質を数千年来変えることなく保ってきた。一方、複流音言語の代表的な二つの流音、舌尖震頭音 (trill) と側面音 (lateral) も数千年来一貫してその音質は変わっていない。しかしその反面、この二つの流音には変異音が多い。その代表的なものが約三百年前に西ヨーロッパにおいて発生した非歯茎化流音である。即ち現在の英語の [ɹ] やフランス語、ドイツ語、北欧諸語に見られる [ʁ] や [ʀ] である。これは非常に限定された地域に起こった特殊な現象のように見えるが、現代の世界の言語勢力図を見ればその影響力の大きさを推測することが出来よう。このような二面性は何に由来するのであろうか。

本論は以上のような問題に決定的解決を与えたとは言えないかも知れないが、少なくとも問題を提起し、明確な解決の方向を示すことを目指している。

キーワード：単一流音言語、複流音言語、流音の分化、流音の非歯茎化、弾音化、ラ行音

0. はじめに

世界には様々な言語体系が存在していて、それぞれに共通した側面と、相違した側面とをもっている。言語に用いられる音声についてもそのことは容易に見てとれる事である。どの言語も比較的

少数の母音とそれよりも数倍、数の多い子音を用いて音韻体系を構成している点で共通している。言語の材料であるこれらの音声は、人類共通の肉体的、生理的基盤に根ざすものであるから、本質的にはほとんど同一のものであると言ってもいい

くらい共通性を持っている。しかしこのように共通の基盤の上に立ちながらも人類は共通の言語に到達することなく、反対に互いに疎通不可能な様々の言語体系を形成している。このような分化も恐らくは言語に内在する根源的な性質の発現であろう。

言語の体系ごとにそれぞれ独自の音韻、韻律、統語、語彙の体系をもっている。このうち音韻体系は、共通の肉体的、生理的条件に根ざす言語音声と直接結びついているから共通した性格が最も強い。これに対して、語彙の体系は言語における肉体的、物理的要因から最も遠ざかったものであって、そのために最も奔放な分化を開花させている。共通の基盤としての音声、そしてこれに対する無限の自由性を孕んだ分化の根源にあるもの、この二つの相反するものの間の緊張、これが言語を成立させている一つの軸である。

言語において音声は常に何らかの形で意味に結びついている。意味は常に音声に支えられている。音声は肉体の有限性に結びついてその種類は数的に限定されたものであるが、組み合わせと複合によってほとんど無限に増殖することができる。無意味に増殖するわけではない。音声形の増殖は同時に意味の増殖である。しかし音声と意味との関係は十分明らかにされてはいない。或いは、非常に表層的に、この二つの関係は明らかであるとみなされやすい。つまり、言語記号の恣意性という有名な原理は、一見非常に分かりやすい事実（たとえば、同じ対象を言語によって全く違った音形で表しているというような）から疑問の余地のないことと考えられがちである。この立場からは、音声と意味の結びつきはありえないものになる。言語における普遍的なものを求めようとする試みが、前世紀後半以来言語学の主要な潮流となっているが、この試みの中で、言語音声の非常に明白な共通性という事実に関心が払われることが少な

いのは、音声と意味を分離する見方がこの潮流においてもなお支配的だからである。

普遍的な文法を探求しようとするこの潮流は主として統語（syntax）に焦点を定めている。しかし統語もまた、音声的基盤の上に立っている。つまり、発話の実現時においては、語の連鎖は必ず韻律（prosody）を伴っているのである。韻律を構成する、強勢、声調、音長、リズムとイントネーションといった要素は、確かに言語の本質から外れた副次的なものの様に見える。そのために統語論（syntax）の研究が韻律論（prosody）と結び付けられることはあまり見られない¹。しかし韻律は音声の表出と本来切り離すことのできない一体化したものであることを考えれば、そしてまた、言語の音声は、言語における普遍的、根源的なものと直接的に触れている可能性を考えれば、韻律の研究を切り離した普遍性の探求には危惧を感じざるを得ない。本論はこれらの問題と正面から取り組もうとするものではなく、その反対に、言語を構成するごく小さな成分に過ぎない、ある一つの種類の音声（流音）について考察することによって、これらの問題を考える端緒なりとも見出すことができれば目的は果たされたと言うことができよう。

1. 流音とは何か

音声学において、調音の位置と様式によって言語音声の種類を分類することが一般に行われている。閉鎖音とか摩擦音という用語はそれ自体でその音声の性質をよく表現している。しかし流音という名称はこのような発音器官の構造と調音様式

¹ これは一般的な印象としていっているのであって、実際にはStockwell(1960)のように生成文法理論の初期からこの問題に着目した研究もあったのは事実である。

の分析に基づいた近代的な音声学の命名とは全く異質なものである。事実、この流音（英 liquid, 仏 liquide）という名称は古い起源をもつもので、遠くギリシャ、ローマの文法家たちに遡るものである。ローマの文法家たちはこの用語をギリシャ語から訳すときにliquidus（液体の、流体の）というラテン語を充てた。これは現在のこの用語が専ら l と r の文字が表す音を指しているのとは違って、鼻音/m,n/をも含めた分類であった。これらの古代の流音に含まれる音声/l,r,m,n/は、現代の音声学では噪子音（obstruent）に対立するものとして用いられる鳴音（sonorant）に丁度相当する。古代の分類によるこれらの流音は、声を伴った呼吸がある箇所では閉鎖されながら、同時に口や鼻から部分的に流出するという特徴を捉えたものであった。それは丁度、水のような流体が僅かの隙間から必ず流出するという性質を連想した巧みな命名であった。しかし現代の音声学では母音の鼻音化のような現象も一緒に扱う必要性から鼻音の概念は流音から切り離されるようになった。その結果、流音といえば現代では/l/と/r/の音素をいう慣習になっている。しかし英米の音声学者はこの流音という用語も避ける傾向があるように見られる。たとえば音声学辞典の流音の項を引いてみると、「ある音声学者たちによって/l/と/r/の音素を指すために使われている」²というような距離を置いた記述がなされている。事実、現代の代表的な音声学者の一人とみられるLadefogedなども流音（liquid）という術語はまったく用いず、英語の流音、[l] と [ɹ] は [w,j] と共に接近音（approximant）として分類している。これは何故かと言えば、英語の [ɹ] の音声は本来の流音の特徴である舌端と歯茎との接触を既に失っているからである。このために流音（liquid）という語

が暗示する特性に合致しないのである。

現代の音声学では、l の文字と r の文字で表記される音声は流音と呼ばれているわけであるが、このうち l の音声は、側面音（lateral）と呼ばれて言語間の変異の比較的少ない安定した音価をもっている。側面音と呼ばれるのは、この音の調音の際に、舌と上歯茎の接触が中央部でのみ行われて、息は閉鎖部の両側（時に片側）から流出するからであり、流音という名称が最もふさわしいのはこの音である。これに対して、r の音は非常に変異が目立つ。しかし実は r 音の変異は、通時的にも共時的にも、極めて限定された時代と地域に限って出現しているものなのである。r 音の変異の代表的なものは、西ヨーロッパにおいて、およそ300年前に突然出現した現象なのであるが、それが近代世界において優位を誇った文明圏の言語における現象であるために我々非西欧圏においてこれらの言語と交渉を持つものにとって特別に意識せざるをえない面がある。

英語の/r/は現代においては、舌尖を歯茎に接触させることのない接近音であり、国際音標文字（IPA）では [ɹ] で表される。この音が1636年にはまだ出現していないこと、そして当時はまだ古期英語以来の舌尖震顫音（trill）が行われていたことは、Ben Jonsonの証言から明らかである³。[ɹ] がいつ現われたのかは明らかではないが、後述のように、ヨーロッパ大陸において1700年前後から舌尖震顫音 [r] の弱화가、パリを出発点として北方ゲルマン系諸語の間に急速に広まっていたことを考えると、イギリスにおいてもヨーロッパ大陸と共通の集合心理的な意識の変化の表れ

² D. Crystal, *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*

³ R is the dog's letter, and hurreth in the sound, the tongue striking the inner palate, with a trembling about the teeth. (Ben Jonson, *English Grammar*. 1636)
この引用は田中1970に拠る。

としてほぼ同時期に同様の変化が起こったと推測することができる。

現代のヨーロッパ大陸は r 音の発音に関して大別すると二つの地域に分かれる。一つは舌尖震顫音〔r〕の地域で、イタリア語、スペイン語等のロマン語圏、及びロシア語等のスラブ語圏である。もう一つは舌端の代わりに舌の後背部と口蓋垂の相互作用による音を用いる地域で、フランス、ドイツから北方ゲルマン語諸国にかけて広がっている。最初は口蓋垂を振るわせる震顫音としてこの音は現われた。民衆層の中から発生したので「場末の r」と呼ばれることがある。IPAは〔R〕である。この口蓋垂震顫音が更に弱化したものが有聲、或いは無声の口蓋垂摩擦音〔ɣ〕で「パリの r」と呼ばれる。パリの上層階級の間から発生したといわれている。そしてこの発音はその後急速にドイツや北ヨーロッパ諸国の間に受け入れられて、r 音の発音の変化を引き起こしていった。このような変化がいつ起こったのかについては定説はない。「この変化の時期は大いに議論されたが、18世紀以前であるとは思えない」とDauzat 1954には述べられているから、前述の英語の〔ɹ〕への変化を考え合わせると1700年前後と考えるのが妥当であろう。

流音を表すアルファベット文字は l と r である。この二つ以外にはない。上述のように、ヨーロッパにおいて r 音の変化が起こったが、書記体系における文字の変化は必要がなかった。/r/の発音がどう変わっても、音韻体系自体の変化ではなかったから音素としての/r/の地位には何の変動もなかったからある。アルファベット文字に連なる系譜を、どこまで過去に向かって辿っていても常にこの二つの流音を表す文字の存在が確認される。ということは、これらの原初的な文字を用いていたセム系の言語の音韻体系は既に二つの流音を含んでいたことを意味している⁴。印欧語

の歴史からも同じことが見て取れる。印欧語の起源的な層は文字資料を残していないが、確認された資料を基にして推定された印欧祖語において二つの流音が存在したことは定説となっている。

二つの流音の音価についても時間空間を越えた等質性が見られる。綴り字における l の文字は一貫して側面音と呼ばれる一定の調音方法によって発せられる音声を表している。舌尖の中央部のみを歯茎に接する調音がこの音の正統的な発音であるが (IPAは〔l〕)、語の中の位置によっては軟口蓋化する。英語のいわゆる「暗い l」である (IPAは〔ɫ〕)。硬口蓋化したもの〔ɰ〕はスペイン語やイタリア語に見られる。これらは単なる異音 (allophone) のこともあるし、音韻的に対立する場合もあるが、いづれにしても〔l〕を置き換えてしまうことはない。この点が上述の/r/の変異の場合とは違う。/l/は印欧祖語においても、サンスクリット語においても、古代ギリシャ語においても、現代のアラビア語においても、現代の西欧語においても基本的に皆同じ発音であると考えられている。一方、/r/の発音については、現代の西欧語を中心に観察すると一見非常に多様性があるように見える。しかしこの多様性は、時代的にはここ数百年のことであり、また地域的にも、フランスから北のヨーロッパとイギリスに限定されている。この地域においても、この変化が現われる以前は、共通の、本来の/r/音が行われていたのである。すなわち、舌尖震顫音 (rolled r, 巻き舌の r〔r〕) である。IPAがこの音に対して、アルファベットの r の文字を充てているのは、この音を/r/の正統的な音とみなしての事である。側面音〔l〕の音声と並んで、流音としてはこの音声紀元前数千年前から、ユーラシア大陸の大きな

⁴ しかし音節文字であったクレタ島の線文字Bだけは奇妙なことに流音を一つしかもっていない。

部分で行われてきたのである。

言語一般について、その歴史を考えると、大きく二つの時期を分けることができる。残された何らかの資料によって言語の状態を多少とも知ることのできる時期とそういった資料がなく、言語の状態を知ることのできる手がかりが存在していない時期である。発せられた瞬間から虚空に消失する音声言語の痕跡を時空を超えて留めるものは文字である。生きている肉体から発せられて、空気という物質の波動として空間の中を伝播し、減衰して最後には消失する音声言語に対して、物体の表面に依拠する抽象的な二次元平面の上に、意識の中の抽象的な運動の表出として、手の動きの痕跡としての一次元的な線によって構成される文字言語は、表記面の物体の分子構造の安定性によって永続性が守られている。

我々が過去の言語について、言語の変遷について知ることができるのは文字として留められた言語を通してである。文字以前の状態は深い闇の中と一般に考えられている。正統的な言語学はこの部分に関わることを差し控えるのが通常である。

最初の文字が出現したのはエジプトやメソポタミアにおいて紀元前3500年頃と言われている。文字の記録が残されているのはそれ以後の5千数百年間である。人類の言語が出現したのはそれよりも数十倍過去に遡ると考えられるから我々が過去の記録によって言語の状態を多少なりとも知りうるのは言語の歴史の中のごく最近の部分に過ぎないことになる。しかし我々は言語について、歴史を離れて、非時間的な観点から、と言ってもいいゆる共時態的な観点ではなく、抽象的にその本性について考えるという可能性もある。

西方の世界においては文字法の完成に向かう歩みはひたすら表音的文字を目指す歩みであった。こうして現在世界的に広い地域で用いられているアルファベットが生まれた。アルファベットの対

極にあるのが東方の世界で生まれた漢字である。漢字は表意的、表語的文字であって音声と直接的に結びついてはいない。しかしどんな文字法も対立、矛盾する異質の原理をも包含しているものであり、漢字の場合も形声という表音的原理が重要な役割を持っている。同様に、アルファベットによる書記体系も表音的原理で一貫しているわけではない。現代の西洋諸言語の正書法 (orthography) を見ると明らかなように、音素と文字は十分には対応していないし、音声と文字のしばしば見られる不一致のために、聴覚よりは視覚に対応する表語的性格も著しいのである。

さて、アルファベットが成立してから、流音は r と l の文字で表されてきた。この事は、アルファベットが用いられている言語圏においては、この二つの流音が、対立する独立した音素として常に確立していたということを意味している。周知のように、アルファベットはギリシャ文字として始めてその原理を確立したのであるが、ギリシャ文字に至る発展段階の種々の文字体系を見てもやはりこの二種の流音の区別は明白である。印欧祖語に遡っても同じことが見られる。残された文字資料から知ることのできる時代において、これらの地方の音韻体系においては、二つの流音の音素が確立されていたことは明らかであるが、これに先立つ文字資料の存在しない時代において、流音が一つしかない体系が存在したであろうか。そういう可能性を問題として提起することが可能である。なぜなら我々の日本語を含めて、流音が一つしかない言語体系が現に存在しているからである。

ここで、流音という一つのカテゴリーが立てられることの本質は何であるか、流音の本性とは何であるかについて考えてみる必要がある。

先に述べたように、英語の [ɹ]、フランス語等の [ʁ] や [R] の音声は、比較的近年になってか

らこれらの言語の音声体系の中に登場したものであるが、これらの音声は書記体系の中では従来どおりに r の文字で表されるために、これらの音声を含む語においては、語としての同一性は揺ぎ無く保持される。しかしそれ以上に、たとえばフランスで、ブルゴーニュの人が [r] と発音しても、パリの人が [ʁ]、或いは [R] と発音しても、そこに同一の音素 /r/ を容易に認識することができるのは、これらの音声が何らかの共通性を持っているからである。その共通性とは何であろうか。

周知のように、音素とは抽象的な存在であって、具体的に音として現われるときには、様々な変異体をとることはありうる。音素が弁別的機能を果たしている限りこのような変異は意識されることはない。しかし子音の場合、口腔内の上、下の二つの調音部位の相互作用によって音声の調音が行われ、これらの調音部位がいわゆる弁別素性の重要な構成要素になっている。これらの調音部位は固定したものではなく、音の環境にしたがってある程度の広がりの中を移動する。例えば、「kata 肩」という場合の /k/ と「kita 北」という場合の /k/ は同じ音素であるが調音点は離れている。しかし移動できる範囲には限界がある。それを規定するものとしていわゆる弁別素性というものがある。/k/ の場合は「軟口蓋性」とか「舌背音性」とか呼ばれるものであって、これが音素 /k/ の調音部位の移動範囲を限定していると言ってもよい。

しかしフランス語の [r], [ʁ], [R] の場合、これらは音素 /r/ の様々に異なった実現形なのであるが、これらはある特定の音環境においてのみ現われるという意味での異音 (allophone) ではない。なぜなら、[r] は舌尖と歯茎、[ʁ] と [R] は後部舌背と口蓋垂というように、調音部位が非常に離れたところに移動しているのである。これ程調音点が離れていてなぜ同一の音素として認定される

のであろうか。/p/, /t/, /k/ のような子音は、同じように閉鎖音であるけれども、調音点が明確に異なっているために互いに混同されたり、同一視されたりすることは普通はない。調音点の相違が音素としての相違と切り離せなく結びついているのである。これらの子音は母音性 (vocalic) を全く持たない閉鎖音 (すなわち母音とは全く対蹠的な音声) であるために調音点以外の差異を持たないのである。r 音がこれらの閉鎖音と異なるのは、母音性 (或いは鳴音性) をもっているという点である。母音性をもっているから、母音と同じように明確なフォルマント構造をもっている。しかし母音ではない。なぜなら子音性 (consonantal) をも持っているからである。子音性とは下部構造物、たとえば舌の一部分と口腔の上部構造物 (歯茎、口蓋垂等) との相互作用によって口腔内の空気の流れに障害を生ずることである。/r/ の異音が通常の子音と違うのはこのような二重性によってである。この二重性が保障されてさえいれば、調音点が歯茎であっても、口蓋垂であっても本質的な問題ではないから同じ音素として認識されることが可能なのである。

調音部位が違えば音質は当然変化する。この変化を差異と見做さずに同一のカテゴリーとして、他の同一レベルのカテゴリーとの対立関係において一つの単位として認める視点が存在する。また、別のレベルで、別の視点に立つと、この変化を差異と認めて、別の音声単位として認めるということも起こりうる。例えば、通常の舌尖震顫音に対して、摩擦を伴った震顫音「シュー音の r」を別音素として対立させるということが、チェコ語やギリシャ語の方言に見られるという⁵。

同じことが流音を大きく二つに分けている対立

⁵ Jakobson 1973, tome2:130 に拠る。同じ記述が Bloomfield 1933:100 にも見られる。

に関しても起こっていると考えてみる事ができる。即ち/l/と/r/の対立である。この対立は、世界の言語の現状において圧倒的な事実として現われている。つまり、この二つの流音を対立する二つの音素として含む音韻体系をもつ言語と、流音を一つしか認めない音韻体系をもつ言語が世界には並存しているのであるが、前者の方が圧倒的に数の上で優勢なのである。流音が一つしかない言語の話者にとって二つの流音の区別をすることは通常難しい。日本人が外国語のlとrの発音が区別できずに、全ての流音に対して日本語のラ行子音で対応しているというのはよくあることである。これは結局、流音同士、音素として区別されていても、共通性があり、同じものとして認識される可能性があるということの意味している。事実、二つの流音が音素として確立している言語において、この二つが混同されることは普通はないのであるが、たとえば、ラテン語を起源とするロマンス諸語の中で、lとrの入れ替えが起こっている例がかなり見られる⁶。この二つの流音の類似点、共通点は何かという問いは、直ちに流音の本性、本質は何かという問いに結び付くであろう。

第一に、二つの流音の典型的な形態である側面音と舌尖震顫音は、いずれも歯茎音であるという点で共通している。相違は、[l]は舌尖の歯茎に対する接触を、時間をかけて保持するのに対して、[r]は舌尖の歯茎に対する瞬間的な接触を反復するという点である。どちらも舌が歯茎に接触して声の流出を阻害しているという点では子音性を保持している。同時にどちらも有声音であり、発音の間、声は維持される。この点で母音性をも

保持している。事実、母音特有のフォルマント構造が見られるのは[l]でも[r]でも、又は[j]でも共通している。ただ[l]の方がフォルマントは弱い⁷。これは[l]の方が母音性は弱い、つまり子音性が強いということを意味している。この点が[l]と[r]や[j]の大きな相違点である。この事は音声周波数分析装置のような器具を用いなくても、[l]の方が[r]より舌による閉鎖の度合いが強いこととか([j]には閉鎖は全くない)、[j]が、英語やドイツ語に見られるように、後ろで母音によって支えられないときは、容易に母音化して[ə]に変化すること(つまり母音性が強いということ)などから直感的に容易に理解できることである。

ところが流音の場合に問題になることは、流音の音素としての性質を決定しているのは必ずしも調音の位置ではないという点である。先に/r/の変異音が調音位置を転位させながら、/r/の音素としての機能にはなんら変更のないことを見た。/l/についても同様のことが言える。[r]は調音点を歯茎と舌尖から、口蓋垂と舌背後部に移した。同様に、[l]は軟口蓋に移ることがある。軟口蓋化された[ɫ]である。ラディフォウギッドによれば、アメリカ英語では多くの場合、/l/は、語頭にあっても語末にあっても軟口蓋化している。これに対して、イギリス英語では、語末においてのみ[ɫ]になる(いわゆる暗いl)。「私自身の音声では、舌全体が口の奥上方に引き上げられ、その結果舌尖はもはや歯茎には触れていない。それゆえ厳密に言えば、英語話者の一部ではこの音は歯茎子音ではなく、一種の後舌母音のようなものである」(Ladefoged 1993, 竹林訳1999:82)

流音の音素としての本質は、いわば調音点を超越しているということができようであろう。調音点

⁶ Dictionnaire Linguistique 1973, liquideの項目。また、三雲1996はロマンス語、英、独語に見られるlとrの混同の実例を多数収集している。

⁷ Ladefoged 2001: 53のスペクトログラム図による。

を抜きにして音素の性質を規定することができるだろうか。弁別特徴理論の推進者であった Jakobson はできると考えた。しかし、彼が提示した12対の弁別特徴によって流音を規定することができるだろうか。彼自身が流音について考察した文章があるが、その中で彼はそれが出来るとは言っていないのである。彼の言はこうである。「この子音類（流音）の聴覚的印象にとって決定的なことは〈滑り〉ということであるように思われる。側面音の場合は、口腔声道の中線上の閉鎖にぶつかった呼気はそれを避けて、（グラモン氏 M.Grammont の表現を借りれば）『流出する液体のように、舌の両側から滑り出る。』震顫する r の場合は、呼気に押されて滑るのは、弾性の障害体であって、丁度リードの付いた管楽器の中で作られる音を思わせる。だから、メンゼラス氏 M.Menzerath に倣って、流音は、声道の同時的な開放と閉鎖という点において他の子音類に対立しているということが出来るであろう。側面音においては、二つの同時的な動作は、実際に同時に、しかし二つの別の場所で行われる。それに対して、震顫音においては、この二つの動作が、逆に、同じ場所で、交互に行われるのである。l と r の音声の対比を行うことは音響物理学の役目である。」(Jakobson 1973, tome 2: 130, 〈訳は筆者〉)

以上のように、ヤコブソンは流音に関して、弁別特徴理論の先駆者であるにもかかわらず、弁別特徴については、一言も持ち出すことなく、アナロジックな調音的な表現に甘んじた挙句、最終的な結論を音響物理学に委ねるような口振りである。引用の箇所ですぐ後、この論文の最後の部分で、彼は二つの流音を持つ言語群に対し、太平洋沿岸に沿って伸びている単一流音の言語群の存在について述べている。複数の流音をもつ言語圏の人々にとって、単一流音の音韻体系の実態は想像しがたいものであるに違いない。言語の類型が論

じられる場合に、言語間の様々な対照、対立が考えられてきた。しかし音韻体系における流音の単一性と複数性の対照が取り上げられることはほとんどなかったと思われる⁸。

鼻音は、声の閉鎖と流出が同時に行われるという点で流音と共通した性格を持つ音声であって、共に鳴音として分類されることがある。その典型的なものは、/m/と/n/である。ところが、流音とは対照的に、鼻音の場合、/m/と/n/の両方を備えているのが一般的であって、いずれかを欠く、単一鼻音の言語はほとんど存在しないのである。流音の場合は、複数流音言語の方が多数派を占めているのは明白であるが、その比率はおよそ2対1である⁹。つまり、単一流音言語の存在は決して稀ではないのである。流音と鼻音の間に、このような明白な相違点が存すると言うことは、この両者の成り立ちと本性の中に存する相違に由来するに違いない。

2. 流音対鼻音

最も子音らしい子音といえ、それは疑いなく閉鎖音である。なぜなら、声道に狭窄を作って呼気の流出を阻害するのが子音の特性なのであるが、この狭窄を最も完全に実現するのが閉鎖音だからである。従って、人間の言語で、母音と並んで子音を用いない言語が存在しないとすれば、間違いなく閉鎖音を一つも知らないような言語は存在しないであろう。これは論理的な推論に過ぎないが、事実、世界中の317の言語からサンプルを集積したUCLAのPhonological Segment Inventory Database (UPSID)の資料に基づいて、Maddieson

⁸ 後で改めて言及するが、松本1998は、「流音のタイプとその地理的分布—日本語ラ行音の人類言語史的背景—」という表題でこの問題を取り上げている。

⁹ もっと正確な数的比較は次節で提示する。

1984は音韻毎の各国語における出現頻度等を色々の角度から集計しているが、それによると、閉鎖音が一つもないような言語は存在しないことが確認されている。鼻音についてはどうかというと、閉鎖音とは違って、鼻音のない言語が3.2%存在している。ちなみに、摩擦音は6.6%の言語がこれを欠いていることと比べれば、鼻音は閉鎖音と並んで普遍性の最も高い音韻であるということが出来るであろう。次に、問題の流音との比較である。同じくUPSIDに基づくMaddieson 1984の集計によると、4.1%の言語がいかなる種類の流音も持っていない。この点では鼻音との差異は僅かである。大きな差が出るのは次の点である。鼻音を一つしかもたない言語は2.2%であり、鼻音ゼロの言語より更に少数である。ところが、一種類しか流音を持たない言語は33.9%もある。この大きな差異は、これら二つの言語音種の間の本質的な性質の違いに関連していることは疑いない。もう少し比較を続けてみよう。鼻音も流音も、それぞれ二種類を含んでいる言語は、全体の31.9%（鼻音）と41.0%（流音）で小さくはない相違である。三種類を含む場合を比べると、鼻音は30.0%で二種類の場合とほとんど変わらない。流音では、14.5%で、二種類の場合より大幅に少ない。ここで、流音と鼻音の違いが非常に明白になったということが出来るであろう。

鼻音が一種類だけという場合、その一種類とは/n/であることが一番多い。流音の場合は、一種類のときは、/r/が多数派である。二種類の場合は、/n/と/m/、/r/と/l/、三種類の場合は、/n/、/m/、/ŋ/と/r/、/l/、/ɬ/である。これらの場合の音素の種類については、我々の常識的な知識とほぼ一致しているといってもいいであろう。一致しないのは両者の間に明白な相違があるという点であろう。相違点を整理すると次のようになるであろう。鼻音においては、二種類、又は三種類が

一般的であり、この両者は頻度としても拮抗している。一種類、又は鼻音が存在しないというのはごく稀な例外である。流音においては、一種類か又は二種類というのが典型的なパターンである。一種類の場合は/r/の方が/l/より多い。流音を二種類もつときは、/r/と/l/の組み合わせが多数を占める（83.1%）。

前節で述べたように、調音点によって規定されないという、他の子音類と一線を画す流音独特の性質が、ここでも明らかに見て取ることが出来る。

閉鎖音や鼻音は調音点が音素の弁別性を決定する要因になる。だから/m/、/n/、/ŋ/は対等の資格で音素であり、各言語における出現の頻度にも大きな差は生じないのである。これに対して流音の典型的なペアである/r/と/l/は菌茎という調音点を共有しているというのが大きな特徴である。/r/と/l/の対立は調音点に依存しているのではない。調音点を超越している。/r/も/l/も、言語によってはいくつかの異音（allophone）を持つものがある。それらの異音は調音点を菌茎以外のところに移しているが、同じ流音の音素として認識されることに変わりはない（音韻体系によっては、それらの異音が独立した音素として対立的に機能している場合もあるが、それは周辺的な現象である）。本来的には/r/も/l/も菌茎部という調音部位を共有しているのだが、それらの音響的特長は調音部位に依存しているのではない。そして、互いに独立した音素として機能しながらも、音響的な類似性、共通性を保持しているのである。これらのことは、流音が本来はすべて一つの、共通の源に由来するものではないかということを強く示唆しているように思われる。

3. 単一流音言語対複流音言語

単一流音言語とは、音韻組織の中に流音の音素

を一つだけ持っている言語である。複流音言語とはそれを二つ、又はそれ以上持っている言語である。ここでも又Maddieson1984の集計によるが、流音が一つの場合、それは/r/のこともあるし/l/のこともあるが、/r/の方が頻度は高い(42:32)。この事は注目に値する。なぜなら、一般的に側面音の方が出現の頻度が高いのに、この場合に限って/r/の方が多いためである。「驚くべきことである」とMaddiesonは述べている(Maddieson 1984: 83)。もう一つ注目すべきことは、単一流音/r/のうち最も多数を占めるのは震顫音(trill)ではなく、単震顫音(tap)、又は弾音(flap)であるという点である(42言語の内28)¹⁰。なぜかという点、r音の中で一番普遍的なものは震顫音(trill)と一般に考えられているからである¹¹。ここまです要約すると、単一流音言語は流音として、単震顫音(tap)、又は弾音(flap)を持っているというケースが一番多いということができる。

複流音言語の場合は、もっと複雑である。なぜなら、流音の数が2から10まで様々なパターンがあるからである。しかし一番数の多い典型的な場合は、流音を二つ持っている場合である(41.0%)。

¹⁰ tapとflapの違いについては後述。なおMaddieson1984においては、この両者の区別をデータベースの資料に関して明確にすることは困難という理由で両者を一括して扱っている。

¹¹ Maddieson自身は、r音の調音様式を明確に出来ないケースが資料の中にいくつかあるという理由でこの点について結論を出していない。しかしLadefoged, Cochran and Disner 1977の次の言を引用している。「震顫音(trill)を全く持たない言語は稀である。」また震顫音についての一般的見解の例としてMalmberg 1958, 大橋訳1959の次の記述を挙げておこう。「舌尖顫動音の[r]は、ヨーロッパでもそれ以外の地域でも、この音の原型である。ラテン語やギリシャ語のrや、恐らく印欧祖語のrはこれであつたに違いない。」

更に、流音が二つの場合、それは/l/と/r/であることが一番多い(83.1%)。この場合の代表的な/l/が通常の側面音であることは疑問の余地のないことであるが、/l/のパートナーである/r/については、その代表的なものがtrillなのか、tap又はflapなのか、という点は、Maddieson1984も明らかにしてはいない。しかし、trillの普遍性、つまりユーラシアとアフリカの大語族に属する諸言語においてほとんど常に/l/のパートナーとなっている/r/はtrillであることから考えて代表的な/r/が震顫音であることは間違いないであろう。しかし、この両者、つまりtrillとtap(またはflap)は必ずしも互いに排除しあう関係とは限らない。どちらも同じ音素の異音として現われることがあるからである。

我々に馴染み深い西ヨーロッパの諸言語において、本来のtrill [r]が変化して[ɹ](英語の場合)や[ʀ], [ʁ](フランス語、ドイツ語等の場合)などが現在では、これらの言語において、側面音のパートナーとしてのr音となっている事情については前述した。なぜある特定の時代に、特定の地域においてこのような変化が生じたのかは非常に興味深い問題である。全ユーラシア的視野で見れば、西ヨーロッパの一部分というごく限定された地域の出来事に過ぎないが、この変化の発現した時代は、この地域において、社会、経済、文化の急速な近代化が進行を始めた時期に一致している点は見逃すことが出来ない。この近代化が三百年をかけて全世界を巻き込んで発展した結果が現代の世界である。そしてこの近代化を推進した原動力となった部分に存在していたのが、r音における変化を顕現した西ヨーロッパの諸言語である。

英語を筆頭とするこれらの言語は、そのホームグラウンドは西ヨーロッパの小さな片隅に過ぎないのだが、ヨーロッパ文明の発展の結実は、最終的にこれらの言語に担われるという形で実現し、

現代の世界を形作る中心的な要素となっているのである。旧世界において、近代文明の興隆に到る長い期間の間に興亡した諸文明の諸言語、サンスクリット語、ギリシャ語、ラテン語、近代アラビア語に至るまでのセム諸語、トルコ語を始めとするアルタイ諸語、これらはいずれもかつては歴史の流れの中で、中心的な位置においてダイナミックな影響力を行使したことがある言語である。言語の歴史という観点から見ると、注目すべきことは、非常に些細なことに見えるかもしれないが、これらの言語がすべて /r/ と /l/ の対立を軸とする複流音言語であったということであり、しかもこの /r/ は、舌尖震顫音の [r] (trill) であったということである¹²。現在は trill の /r/ が後退してしまって、別の調音様式による /r/ がそれに入れ替わった西ヨーロッパ（及び北ヨーロッパ）の諸言語も、ほんの数百年前までは、北アフリカからユーラシア大陸の大部分にかけて行われていた諸言語と同様に、舌尖震顫音 [r] と側面音 [l] の対立を軸とする流音体系をもっていたのであった。この流音体系が、北アフリカからユーラシア大陸の大部分にかけて広く行われていた時代が、少なくとも七、八千年に及んでいると推定することが出来る。この一つの同じ音韻的特徴を共有する広大な地域に一つの楔が打ち込まれた。それが、今から三百年ほど前に、西ヨーロッパの一部分から源を発した r 音の変化の動きである。パリから発した波は、ドイツ、オランダから北欧に向かって波及し、ロンドンから発した波紋は、イギリス帝国の公式言語に乗って、植民地化の波にも乗って、北米、インド、オセアニアにまで広がってい

る。ヨーロッパにおける新 r 音化の波の急速な広がり、丁度、ヨーロッパから新世界に向けての植民地化の波と時代を同じくしていることは注目すべきである。それとほぼ同時代か、或いは少し先立つ時代に、中南米に広がったスペイン語とポルトガル語は、旧世界の旧 r 言語の代表として、トリル [r] が聴覚にとって特に印象的に聞こえるロシア語などと共に、近現代世界の進展の中でやや異なった歩みをとってきたという印象はぬぐえない。

ここで、r 音の発音様式に関して相違の生じたために成立した新旧二つの対照的な世界の並存という図式を見て取ることが出来るであろう。この二つの世界は、人類の歴史の中ではごく最近の、ここ数百年の間に成立したに過ぎない。このうちの古いほうの流音体系をもった世界は、七、八千年以上前からユーラシア大陸の大きな部分を占めて成立していたのであるが、これが独占的な単一世界を形成していたのではない。実はもう一つの流音体系の世界が並存していたのである。それが、Jakobson の指摘していた「太平洋岸に沿って伸びている、単一の流音音素しか持たない言語圏」である (Jakobson 1973, tome 2:130)。

日本の周辺は皆この言語圏であり、アイヌ語、朝鮮語、中国語¹³等、日本語との系統的関係が言語学的に証明されていると言うには程遠いが、いずれも、歴史時代においても、恐らくは前歴史時代においても、相互に種々の関連があったであろ

¹² 過去の時代の音韻については実証的な証拠は残されていないことが多い。しかし一般的にはこのように推定されているのであるが、本論では、理論的にもそうであったはずだという論拠を示したいというのが論点の一つである。

¹³ アイヌ語が日本語と違う点は、アイヌ語では /r/ が語頭に立つことがある点である。朝鮮語では日本語と同じく語頭に立つことはないが語末に立つことはある。この場合は [l] として現われるが、これは /r/ の異音 (allophone) であり、音素としては一つである。中国語の場合は、流音としてはどの方言も /l/ だけであるが、北京方言にのみ、そり舌の /r/ が現われる。しかしこれは比較的近年になってから登場した音声である。

う。日本語の流音単一性は我々が現に身を持って生きているところである。日本語は歴史時代の我々の知る範囲において常にラ行子音が唯一の流音であった。しかも他の子音、サ行子音、タ行子音、ハ行子音が歴史時代において、何段階かにわたる変化を遂げたのとは対照的に、一貫してその音質は変わらない¹⁴。ラ行音には強固な不変性、安定性が備わっているように見える。この不変性、安定性は我々が現に体験しているものである。例えば、日本人が、複流音の外国語を学習するとき、複流音の体系を受け入れることを困難にしているのがこのような日本語のラ行音の不変性、安定性なのである。現代では多くの日本人が印欧語に属する外国語を学習しているが、この困難は、日本人が外国語を学ぶときの様々の困難の、いわば象徴のようなものである。

ところで、不変性と安定性を備えているのは、日本語のラ行音だけではないのである。それが、流音一般について言える特質であるという松本(1998: 2)の指摘を引用しておこう。

このような言語学史的背景からも窺えるように、流音と呼ばれる音種は、諸言語の音体系の中でやや特別の位置を占め、また通時的に見ると、他の子音や母音に比べて比較的变化の少ない安定した音である。実際、ギリシャ語やサンスクリット語を含めた印欧語族の全体を見渡しても、流音の l と r は鼻音の m、n と共に言語間の対応が最も安定し、数千年にわたる印欧語の歴史の中でその基本的性格をほとんど変えなかった。

しかし、確かにその通りであるとしても、これは事実の一側面に過ぎないかも知れない。安定性

の中に大きな流動性が秘められているということがあるからである。先に、印欧語の数千年に及ぶ安定した流音体系の歴史の後に、三百年程前に西ヨーロッパの一角において始まった r 音の変化の波について述べた。言語音声の一小部分における些細な変化のように見えるが、この変化は、ユーラシア大陸の大きな部分において数千年安定状態を維持していた流音体系に大きな亀裂を生じさせたのである。このような言い方は不自然に大げさすぎると見られるかもしれない。なぜなら流音の変化といったところで、それは /r/ の音声としての実現の仕方における調音様式の変更に過ぎないからである。諸言語の音韻体系の中の流音の地位には何の変動もない。この意味では流音の安定性と不変性は完全に守られている。だから r 音における変化は、ほとんど無意味な、表層的な部分に属することのように見えるのは当然である。この変化の意義を従来の音声学や音韻論の枠の中でのみ考えることは難しいように思われる。しかし例えば次のようなことを考えてみよう。

日本語話者が複流音の外国語の流音を学習するときの困難について先に触れた。この困難は非トリルの /r/ を持った言語(英、仏、独等)の場合の方が大きい。なぜなら、これらの言語で主に使われる r 音である [ɹ] や [ʁ] や [R] は日本語の音韻体系にとって全く異質な音声であり、日本語話者には日常的に触れる経験のない音である。更に、これらの音声は [r] (トリル) の弱化したものであり(より少ないエネルギーで発音できるから)、[l] とのコントラストはトリルの場合より弱くなる。そのため日本語話者にとっては聞き取ることもトリルの場合より難しくなる(トリルと側面音とのコントラストが、二種類の流音のコントラストの中で最大のものである)。側面音とトリルの差異は聴覚にとって非常に明白であるから、このような対立を音韻体系の中に持たない日

¹⁴ この点については次節において検討する。

本語話者にとっても聞き分けやすい。

一方、非歯茎化した非トリル r 音も、側面音も、日本語の流音である弾音 (flap) も皆、流音としての特質は共有しているから、流音としては弾音 [ɾ] しか知らない日本語話者は、[ɹ] も [ʁ] も [ɾ] として聞いてしまうのである。またトリルの r 音は日本語話者の中でも、この音を日常的に時によって使うことのある人もいるくらいだから、日本語の音韻体系にとっても全く無縁とは云えない。しかし非歯茎化した非トリル音は、日本語の音韻体系のなかでこれらの音が実現されることは絶対にないといっているくらい無縁な音である。つまり、弾音 [ɾ] 一つだけしか知らない日本語の流音体系にとって、舌先震顫音 (トリル) を含んだ流音体系の方が、非トリル r 音をもった流音体系より親近性が大きいと言うことができるであろう。

西ヨーロッパに端を発した複流音体系における亀裂、その結果生じた新旧二つの複流音体系の並立、これは流音の一部分において生じた音声変化に過ぎないものであり、ほとんど無意味な変化のように見える。音韻体系、言語体系の全体から見ればほとんど変化ともいえないように見えるであろう。特に問題の言語圏の中に身をおいて考えるなら当然そのように見えるであろう。しかしもう一つの視点がある。もう一つの流音体系、即ち、単一流音体系からの視点である。この立場から、二つの複流音体系との相互作用 (例えば第二言語としての学習といったような) に身をおいたときに、新旧二つの複流音体系の間の相違はもっと違ったものとして見えてくるのである。

単一流音体系から見たとき、二つの複流音体系との間に親近性の差が認められるということは、これら三つの体系の分化の順序に関連していると推測することができる。約三百年前と考えられる一番新しい分化については繰り返して述べた。こ

の分化の存在自体がそれに先立つ第一次の分化の存在を当然推理させる。この第二次分化以前に存在していた二つの流音体系の並立は歴史時代が始まったときには既に成立していた。従って第一次の分化、即ち単一流音体系から複流音体系への分化は歴史時代以前に属する。この点に関して、全世界にわたる流音タイプの分布についての周到な調査に基づく松本1998の結論の部分は、大変示唆に富んでいるのでそれを引用しておこう (p38,39)。

その分布をまずユーラシアについて見ると、ここでは複式流音型に属するユーラシア内陸部と単式流音型に属する太平洋沿岸部とがかなりはっきりと分かれる。この二つの言語圏は、概略、北はチュクチ・カムチャッカ半島から南はインドのアッサム地方を結ぶ線を境として、この線の太平洋側には、チュクチ・カムチャッカ諸語、ギリヤーク語、アイヌ語、日本語、朝鮮語、中国語、チベット・ビルマ語族の東方群、ミャオ・ヤオ諸語、タイ・カダイ諸語、ムンダ語を除くオーストロアジア諸語、オーストロネシア諸語が分布し、一方その内陸側には、ツングース、モンゴル、チュルクを含むアルタイ系諸言語、チベット・ビルマ語族の西方群、アジアの印欧諸語、ドラヴィダ諸語、更にその西方に、ウラル諸語、コーカサス諸語、セム諸語、ヨーロッパの印欧諸語、その他いくつかの系統的孤立語が分布する。

ユーラシアに現われたこの二つの流音分布圏は、ユーラシアを越えて更に他の地域へと伸びている。即ち、ユーラシア内陸部の複式流音圏は、アフロ・アジア語族を介してアフリカにつながり、サハラを含むアフリカ北部を同じ圏内に包み込み、ここに「アフロ・ユ

ーラシア」とも呼ぶべき広大な言語圏を形作る。一方、太平洋沿岸部の単式流音圏は、その北方でエスキモー・アリユート諸語を介してアメリカ大陸へとつながり、ここに太平洋を取り囲んで「環太平洋」ともいうべき言語圏が形作られる。

流音タイプの単式か複式かによって分けられたこの二つの大言語圏の周辺に、今度は、流音音素を全く欠如するか或いは比較的新しくそれを獲得したと思われる少数の言語圏が限られた地域に散在する。即ち、北米東部のアルゴンキン諸語、中米のオト・マンゲ、ミヘ・ソケ諸語、ニューギニア高地のパプア諸語、そしてアフリカ南部のコイサン諸語などである。

今これら三つの流音タイプの地理的分布を地球全体の規模で見渡してみると、そこに人類言語史の興味深いひとつの局面が浮かび上がってくる。即ち、アフリカ北部からユーラシアの内陸部は、「新人」と呼ばれる現代型人類の登場以来、人類史の常に中心舞台となってきた場所であり、その意味で複式流音型の分布圏は、言語地理学でいわゆる典型的な“中心分布”の様相を呈している。一般に言語変化は、その中心部において最も広範かつ連続的に伝播し、それによって均質化された新しい言語層が形作られていく。それに対して単式流音型の言語圏は、この中心分布の周辺にいわば“周圈的”な分布を作って広がっているかに見える。つまり中央で起こった言語改新の波が及ばなかったために、中央では失われた古い言語相がこれらの地域に残存したと解釈できるからである。

第一次の分化、即ち単一流音体系から複流音体系への分化が一万年以上前に起こったであろうこ

とがここで示唆されている¹⁵。それ以前は単一流音の時代である。それは数万年続いたであろう。しかし時間の隔たりに圧倒される必要もないであろう。なぜなら、単一流音言語圏が、新しい波の波及によって中心地帯からは失われてしまった古い層の周圈的残存であるとするれば、現代においてもその古い言語相の本質的部分は残存している可能性が十分あると考えられるからである。日本語の起源、系統については諸説があって混沌状態が続いている。しかし流音についての以上の考察から示唆されるように、日本語の流音の単一性は、人類言語の古い層に由来する可能性が十分考えられる。日本語の流音の諸相について検討することによって新しい展望が開かれる可能性がある。

4. 第三の流音、又は原初の流音

日本語の「ら、り、る、れ、ろ」はローマ字表記では普通「ra,ri,ru,re,ro」と表される。実際はrでなければならない理由はないので、「la,li,lu,le,lo」でも構わないはずである。複流音言語圏では古来流音に対してこの二つの文字が用いられてきた。この世界において最も広く用いられているアルファベットの歴史を遡っても、常にこの二つの流音に対応する二つの文字が区別されていた。二つの流音には様々な変異音が存在しているとはいえ、伝統的に二つの流音文字が揺ぎ無く守られてきたのは、典型的に対立する二つの流音音素が常に存在したからである。この二つの音素の最も一般的

¹⁵ 松本1998も示唆しているように、単一流音の時代の前には、無流音の時代があったことが当然考えられる。そうすると最初に流音が出現したときを第一次分化と呼ぶことも出来よう。しかしここでは、流音というものが存在しない状態があったこと、ある時点で流音の出現という出来事があったであろうことだけ念頭において、流音が存在した時代にだけ視野を限定したい。

な実現が側面音と舌尖震顫音であることは既に述べた。この二つが、広い地域で、何千年間も流音の二元性を体現する音声として用いられてきたのは当然である。なぜなら、この二つの音声において、流音の二元性は最も明確にその対照性を発揮するからである。側面音〔l〕は、舌端の中央部で閉鎖し、両端部では閉鎖を解いて呼気を通す。閉鎖と開放という矛盾した動作を、二つの異なった場所で、同時的に行なうことによって、いわば空間性を獲得する。これに対し、トリルの〔r〕は、舌尖という一つの場所で、閉鎖と開放を断続的に何度も繰り返すことによって、いわば時間性を獲得する。この二つの音声は、丁度古典物理学において空間と時間が二つの異なったカテゴリーとして相対立するように相対立する。

これに対して、原初的な段階の単一流音は、対立を知らない流音であるから、上の二つの流音のいずれとも異なったものであると推定することが出来る。事実、現代の日本語の流音はそのような条件に適っている（アイヌ語、朝鮮語の r 音についても同じことが言える）。現代日本語のラ行子音は、調音様式の特長によって、弾音（はじき音、flap）〔ɾ〕と分類される音に相当すると見做されている。調音点は閉鎖音の〔t〕と同じである。閉鎖音の場合、舌端は作用の対象部である歯茎に向かって、舌筋の前方に向かう動きによって圧迫される。内部の空気が漏れることなく加圧されるためである。空気圧が外部の気圧より十分高くなったときに、舌端は前方に滑らされて密閉は解かれ空気圧は開放される。この時に t 音の独特の噪音が発生する。

ところで、t 音や弾音と調音点を共有する音声に他にもある。〔n〕、〔d〕である。これら四つの音声は、いずれも、程度の差はあれ舌端による歯茎の閉鎖が見られるという点で共通している。閉鎖の強さは段階的に変化する。〔t〕で閉鎖は一番

強い。閉鎖は完全に行われ、密閉された空間内で気圧は高まる。高まった気圧に対抗するために閉鎖は強められる。これに対して〔d〕は有声音であるから、息は声門の閉鎖に打ち勝って出てこなければいけない。その結果、エネルギーの幾分かは失われて、口腔内の気圧は〔t〕のときより幾分か低くなる。それに対応する舌端による閉鎖も弱くなる。〔n〕では、口蓋帆による鼻腔の閉鎖は解除されているために、息は鼻へ抜ける。その結果、口腔内の気圧は〔d〕のときより更に低くなる。それに対応して舌端による閉鎖も弱くなる。大部分の気流は鼻へ抜けるから舌端は完全に密閉する必要はない。それでも歯茎との接触を維持しなければならないのは、鼻音とはいっても、最終的には舌端の閉鎖を解いて、口から出て、次に来る母音と結合しなければならないからである。そのとき、舌端が歯茎から離脱するときの音が子音としての〔n〕である。〔ɾ〕の場合は、閉鎖は瞬間的なものであり舌端は以上の三つの音のときのように歯茎に接して停止するということがない。閉鎖といっても、歯茎との接触は〔n〕のときより一層面積が少なく、部分的になる。瞬間的とはいえ舌尖による部分的閉鎖は行われている。舌尖の動きは急速であるから閉鎖部の圧力はごく弱い。声を伴った気流は、その瞬間に、閉鎖のない隙間から流出している。ラ行子音独特の音色はその瞬間の音である。結局、〔t〕から〔ɾ〕に向かって、舌端が歯茎に対して閉鎖する圧力が順次低下しているのが分かるであろう。〔t〕 > 〔d〕 > 〔n〕 > 〔ɾ〕¹⁶

「単顫動音（tap）もしくは弾音（flap）は、筋肉が一回収縮することによって一つの調音器官が

¹⁶ 歯茎音の系列に関する以上の記述は、服部（1951:93,94,99）、城田（2002:56-61）に多くを負っている。

別の調音器官にぶつけられるもので、閉鎖音を非常にすばやく調音したものにすぎないことが多い。」とLadefoged1993¹⁷も述べているように、[ɾ]の発音に関しては調音器官（舌尖）の動きの速さも本質的な特徴である。この音における舌尖の滑るような、弾くような軽快な動き、圧力の軽さ、これらは皆、動きの速さと切り離すことが出来ない。結局、[ɾ]に先立つ歯茎音の系列の音は皆、調音速度を上げるだけで[ɾ]に変化する可能性を持っている¹⁸。

以上述べたのは問題の言語音が生成されるときの物理的過程についてであるが、たぶん主観的、内観的考察に傾いている。物理的過程であれば物理的観測機器による観測結果を提示することが最も説得力ある証拠となるのかもしれない。そのような研究結果も恐らく存在するであろう。ここでは間接的に知りえた限りの唯一のそれらしきものの存在を紹介しておきたい。それは高橋（2000: 112,113）が提示している二枚の写真資料であるが、そこから[t]の発音の所要時間と[ɾ]のそれとの対照をよく読み取ることができる。一枚は*Handbook of the IPA*（1999:35）から引用されている英単語*sleeping*のスペクトログラム図で、そこで[t]（音響的にt^hと分解されている）の所要時間を読み取ることが出来る。もう一枚はFujimura & Erickson（1997:107）からのスペクトログラム写真で、そこでは、*pudding*と*butter*の中の/d/と/t/が、アメリカ英語の発音として[ɾ]で実現している所要時間を見ることが出来る。二つの音の所

要時間の相違は一目瞭然である。高橋（2000:91）はまた音響音声学者の次のような証言を紹介している。「Heffner（1950）によれば弾音の長さは普通の[t]の3分の1から半分である。」

高橋2000が扱っているテーマは流音ではなく、アメリカ英語においてよく見られる、速く発音したときに歯茎閉鎖音が弾音化する現象である。弾音であるから音自体の性質は紛れもなく流音であるが、アメリカ英語の話者にとっては、本来の流音である[ɹ]や[l]と同類の音という意識は全くないであろう。それは[t][d][n]が特定の環境において変容を受けた結果であり、環境が変われば、例えば発話速度が遅くなると元の閉鎖音に帰ることもある¹⁹。このような閉鎖音の発現の時間幅を左右する要因は何かという点についてはここではこれ以上触れない²⁰。

アメリカ英語に現われるこのような弾音が日本語のラ行子音と同じものと言ってもいいのだろうか。どちらも非持続性の流音であるという点では一致している。しかし違った音韻体系の中で違った前後の音環境の中に現われるということから生じる相違はあるであろう。

この種の音声はflap（弾音、弾き音）と呼ばれるが、またtap（たたき音）とも呼ばれる。調音の微妙な違いによって区別された名称であるが、この区別を不必要と考える立場と必要と考える立場がある。弾音もたたき音も舌端と歯茎との素早い接触という点でtrill（ふるえ音、震動音、顫動音）

¹⁷ 竹林、牧野訳（1999: 204）による。

¹⁸ 閉鎖の開放速度を遅くし、圧力が軽減されると擦音化が起こる。

[t] → [ts] → [s] 或いは [d] → [dz] → [z]

そして [z] → [r]（rではない）の変化が生じることがある。この現象は、特に、ラテン語において rhotacismとしてよく知られている。

¹⁹ この現象は、一般に[t]と[d]に関して言われるが、[n]も除外されているわけではないことはLadefoged（1993）（竹林、牧野訳1999:204）の証言から知ることが出来る。「単顫動音はアメリカ英語の多くの変種でlatter, ladder, tannerのような語の/t, d, n/の通常の発音として用いられる。」

²⁰ この問題は日本語の濁音の生成過程、及び連濁との関連で考えるつもりである。

と共通性を持っている。ふるえ音では普通舌尖は数回震動して歯茎に接触する。この震動及び接触が一回だけの場合、それがtap（たたき音）であると思われることがあるので、単振動音と訳されることがあるがそれは適切ではないであろう。なぜならふるえ音の場合は、舌端と歯茎の間の狭められた空間を流れるかなり圧力の高い気流と舌の筋肉の弾性との相互作用によって震動が生じる。その際の舌尖と歯茎との接触によって生じた有声音がふるえ音であるが、たたき音の場合はそのような圧力を伴った気流は存在しない。舌の筋肉の動きによって接触が行われるのである。しかしたたき音がふるえ音に由来しているということは場合によって有りうることである。スペイン語の場合がそうであると考えることが出来る。スペイン語においては、ふるえ音とたたき音は、対立する独立した音素である。例えばperro [pero]（犬）とpero [pero]（しかし）のように。スペイン語は他のロマンス語と同様にラテン語を起源としているがラテン語にはたたき音は存在しない。従ってスペイン語のたたき音はスペイン語の内部で、ふるえ音から由来していると考えることが出来るであろう。ロシア語もふるえ音が顕著な言語であるが、ここでも同様な現象の兆候が見られるようである。一般に、ふるえ音の震動は多くても4, 5回の反復を伴っているといわれているが（服部1967:99）、城田（2002:64）が引いている説によれば、ロシア語の震動は語頭、子音の前後では普通1, 2回、母音間では1回、語末では3, 4回ということである。そうだとすればロシア語においてもふるえ音に由来するたたき音が存在することになる。しかしこのような例があるとしても、アメリカ英語に現われているようなケースが歯茎音の系列の最後に現われたものとして、弾音（或いはたたき音）の、ひいては流音一般の最も原初的な姿の一つの例と考えるべきであろう。

弾音（flap）とたたき音（tap）の違いの問題に帰ろう。複流音言語圏の典型的な流音である震動音（trill）と側面音（lateral）はどちらも持続性の流音であり、この性質によってこれらは母音と同じように音節の核になることがある。これに対して弾音もたたき音も非持続音であり音節を形成することは出来ない。この点でこの二つはほとんど同じ音なのであるが環境の違いによる微妙な調音過程の違いによって二つの命名がなされている。たたき音のほうは祖形であるt音の性質をかすかに残して、歯茎の一点に対して、弱い力ではあるが舌尖の力を向けて、接触後直ちに舌筋の弾性も用いながら歯茎を離れる。tapという英語の命名は、このような一点に向けられた力の作用に着目したものであろう。一方flapの方は、前後の音環境によって、舌の動きが、慣性の作用もあって歯茎のもっと上方まで上げられて、そこからやや舌端の裏面を歯茎に当てながら滑り降りる。離れるときの弾性の作用から日本語では弾音と名づけられたのであろう。また舌端のやや幅広い接触に着目して英語ではflapと呼ばれるのであろう。日本語のラ行音の場合、語頭にあるときはflapになることはない。語中にあってa,e,oに先立つときには舌はそり舌気味でtapよりはflapになりやすい。このように精密な記述のためにはこの二つの区別は当然なされるべきであるが日本語のラ行音の場合は、相補分布的な異音であるので、統一的に弾音と呼ぶことが適切であろう。

5. まとめ

Blevins（2004:125-129）によれば、舌端（或いは舌頂、coronal）が子音の調音部位の中で最も標準的な、無標の位置であると考えられる音声学者は多いということである。この部位が関連する子音の数は、他の子音に比べて顕著に多いというのが一つの理由である。彼女はこれに対して異を唱え、

色々の理由で結局舌端が特別な調音の部位であるということを否定している。しかし流音という種類の音声の存在を考えると、舌端の特殊性を認めないわけにいかないであろう。流音の存在は舌端と切り離すことが出来ないからである。閉鎖音、鼻音、摩擦音、これら三種類の音の系列の生成を考えると、唇、歯茎、軟口蓋のいずれの部位においてもこの三つ組みは完全に揃っている。[p(b), m, ɸ(β)][t(d), n, s(z)][k(g), ŋ, ɣ(γ)] という風に。しかし流音を生み出したのは歯茎のみである。歯茎音とは即ち舌端音である。舌端音の種類の多さは舌端の動きの自由性の大きさに由来する。舌端はすべての調音部位の中で最大の動きの自由度を持っているのは明らかである。接触することの出来る部位の多さ、接触部位への圧力と舌尖の動きの速度の自在なコントロール、筋肉の大きな柔軟性と弾力性、これらはすべて舌端の動きの自由性を示している。

このような舌端の動きの自由度の大きさと流音と呼ばれる種類の音声の調音の独自性とは密接な関係があるであろう。典型的な流音のペアである舌尖震顫音（ふるえ音）も側面音も舌の筋肉の高度なコントロール能力を要する技巧的な音声である。舌尖震顫音の場合は、気流が適切な圧力を保ちながら保持されるために歯茎との間の間隙を適正に保ちながら、舌端は、震顫を生じさせるために筋肉の柔軟性を保ちながらその弾力性を気流の壁に向かって差し向けなければならない。側面音の場合は、舌尖によって部分的な閉鎖を作りながら、同時に舌の両端においては間隙を作って気流を通すという矛盾した仕事をしなければならない。このような複雑な調音法が一挙に獲得されたとは考え難い。この二つの流音に至る前段階として単一の流音として弾音のみが存在していた段階があったであろう。この弾音にしても一挙に簡単に獲得されたのではない。前節で示したように閉

鎖音 t 音から出発して、段階を経て歯茎音系列の最終的なものとして出現したのである。

幼児の言語獲得過程の中で、流音の獲得が遅い時期に属することは、普遍的に見られることとして一般的に認められている。日本語の場合では、ラ行子音の獲得が最も困難な課題として最後まで残ることが知られている。Ueda & Davis (2001:111~139) によれば、日本人の幼児はラ行音の獲得の際に、ダ行音とラ行音の間の音置換が行われるという過程を経るのであるが、その際、いくつかのパターンがあるとのことである。そのうちの代表的なパターンについて、ラ行子音が音素として分離独立する過程が最適性理論の見地から説明されている。ダ行音とラ行音の置換の代表的なパターンとは、語頭においては [ɾ] が [d] に変わり（ラジオ→ダジオ）、語中においては逆に [d] が [ɾ] に変わる（ジドーシャ→ジローシャ）というものである。すぐに気づかれることであるがこれはアメリカ英語において歯茎音が弾音化する状況と類似している。いずれの場合も流音と歯茎音（日本語の場合は [d] のみ）が語頭と語中において相補分布的に現われ、独立した音素ではない。このときに関わる歯茎音が日本語においては [d] のみであるのに対して、アメリカ英語では [t, d, n] というすべての歯茎音であるのは、英語ではアクセントの強弱のコントラストが非常に大きいために、弱アクセントの音節において子音の弱化を起しやすいたが弾音化を促進するためであろう（最も強い閉鎖音である [t] をも巻き込むほどに）。違っている点は、アメリカ英語ではこの状態が永続的なものであり弾音はいつまでも歯茎音の、環境によって現われる異音であるに過ぎないのに対して、日本語の場合は、これは幼児の言語獲得の過渡的な過程であり、流音はいずれはこのような未分化の状態を脱却して、音素としての独立性を獲得するのである。英語の場合

は二つの流音が既に確固として存在している。この二つの流音は数千年の歴史を持っている。しかし日本語の流音はそれより古い数万年の歴史を持っているであろう。日本語の流音はその単一性を数万年の歴史を通して守っている。このような単一性が破られるときがあったとすれば（事実あったのであるが）それは分化を通して二つの流音が成立したときであろう。

なぜ分化が起こったのであろうか。単一の流音の中にその原因となる可能性が含まれていたであろう。閉鎖音はその阻害性と破裂の際の瞬間性によって母音に対して最も対照的な子音である。歯茎音の中では [t] がそのような子音である。有声音になると [d,n]、有聲であるということ自体が子音としての純粋性を失わせる原因になっている。また声帯を通過する際のエネルギー損失によって、閉鎖性の減少をも引き起こす。流音になると閉鎖性（或いは破裂性）は一層減少して鳴音性（sonority）が高まる。鳴音性が高まるということは母音に近づくということである。流音にはそのようにして母音に向かう性向が本来備わっている。しかし弾音は、閉鎖音の瞬間性をそのまま保持している。持続性がなければ母音に近づくことは出来ない。持続性を獲得するという要求と可能性が弾音には内在することになる。その要求が満たされ、可能性が実現されたのが二つの流音、舌尖震顫音と側面音である。一方は舌尖を震顫させて歯茎との接触を反復させることによって、他方は舌端と歯茎の接触を保持することによって、双方とも持続性を獲得したのであった。このことによって流音は弾音の段階においては見られなかったアクティブな（動的な）性格を持つことになった。第一に持続性と鳴音性を兼ね備えることによって音節の核になるという母音の役割を担うことが可能になった。インド・ヨーロッパ語の古い段階では流音のこの性格が特に顕著である。サンス

クリット語でもそうであるし、若いSaussureが印欧基語の母音体系について思いを巡らせたとき、まず考えたのが流音についてであった²¹。第二にこれら二つの流音のいずれにおいても、舌尖部に力の集中が回復されたことによって、子音としての資格もまた強化された。弾音はその成立の契機に縛られて語中にしか位置することが出来ないという制約があったのだが、これら二つの流音は他の子音と同じ資格で語頭にも立つことが出来るようになった²²。

日本語のラ行音が語頭に立たないということはその歴史を通して一貫しているのであるが、流音が語頭にある外国語を受容するときに、それほどの困難や混乱があったようには思われえない。確かに「流黄」を「ゆわ」として受け入れたり、「のうぜんかずら」が「凌霄」の字音に基づいているといったような例が散発的にあることから分かるように²³、語頭の流音をそのまま受容することを避けたケースもあることは事実であるが、これらは周辺の語彙に属するものであるし、このような流音の受容法は後の時代には途絶えてしまっている。更に万葉仮名においてラ行音は躊躇いなく漢語の流音 [l] で表されていることや、その後の

²¹ *Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes*, Paris, 1878 : 7-19

²² r音が語頭に立たないことは、日本語や朝鮮語のような単一流音言語において見られることはよく知られているが、ユーラシアの複流音言語の中にはr音が語頭に立たない制約をいまだに守っているいくつかの言語があることを松本（1998:32）は指摘している。即ち、モンゴル諸語、ツングース諸語、ドラヴィダ諸語、バスク語、ギリシャ語、アルメニア語、ヒッタイト語などである。

²³ この二つの例は亀井（1968:21）に拠る。この二つしか見当たらないということはこの種の試みが限られたものであったということであろう。

時代においても漢語の流音はすべてラ行音で受容されていることから考えると、漢語の流音、側面音とラ行音との間にそれほど大きなギャップを感じなかったのであろうし、語頭において流音を発音すること自体に困難が感じられたわけでもないであろう。

流音で始まる漢語を躊躇いなく受容したということと、近代において同様に流音が語頭にある西欧語をラ行音によって受容しているということの根底には一貫した日本語の傾向が存在していると思われる²⁴。語頭において流音を抑止する制約が衰退したわけではないのに、外来語の流音に対するこのような寛容さは、外来語と固有語の「区別」の感覚が常に作用していることに起因するのであろう。流音という音韻は、日本語の音韻体系の中に、或いは人類普遍の音韻体系の中に、二次的に、後から加わったものであることを既に述べた。日本語においては、流音の二次性が言語体系の中にそのまま保持されて、その一つの表れが語頭の流音を抑制する制約である。制約は常に破られる可能性を孕んでいて言語はその可能性を追求することによって進展する。この可能性を追求する方向に大きな進展を遂げたのが複流音言語群である。語頭に流音が立つ外来語を容認することによって日本語においてもこの制約は破られたのであるが、外来語と固有語の「区別」の感覚を発達させることによって日本語本来の音韻体系を守りながら、同時に日本語の言語体系の包容力を増大させたのであった。

語頭の流音について言えば、現代の日本語話者においては語中の流音のように弾音〔flap〕的なラ行音ではなく、たたき音 (tap) 的なものである

か、或いは舌端の接触時間を長くして側面音〔l〕的なものになるのが一般的である²⁵。また舌尖震顫音 (trill) についても、地方によって差はあるが、発話の状況によってラ行音がこの音声になることは稀なことではない。このように日本語の音韻体系はこれらの流音と決して無縁なわけではなかった。しかしこれらの流音によって浸食されて、日本語の単一流音の音韻体系が揺るがされるということはなかった。それは日本語の流音がその単一性をもって言語の体系そのもののの中に深く関わっているためである。だから日本語の体系そのものが流音の単一性を守ってきたとも言えるし、逆に流音の単一性が、外来語と固有語の二重性を抱擁しながら日本語の体系の独自性を守ってきたとも言えるであろう。

流音は言語音声の中で後発的な、二次的な音声である。語頭の流音の制約はその二次性の一つの徴候である。複流音言語群においては、舌端の持つ本来の自由性を駆使することによって単流音から複流音への道が切り開かれ、流音の二次性は克服された。日本語が流音の単一性を守ったということは、その二次性を保持したということである。そのことはこの言語の体系に深く刻印されている。例えば、最も典型的に流音が現われるのは、助辞、接辞、或いは擬音語、擬態語など、時枝文法的な用語を用いれば、「辞」的な領域である。一方、「詞」は母音と一次の子音の領域であってラ行音はこれには基本的に参加していない。しかしこれらの点については別のテーマとして稿を改

²⁴ その点朝鮮語においては語頭の流音を拒否する制約が一貫して作用していて、〔n〕や〔j (i)〕で置換している点が日本語とは対照的である。

²⁵ このような傾向が漢語の古代の漢語受容期にもあったであろうという理由で、漢語の語頭の側面音〔l〕はそれほど困難なく受容されたであろうと Hayata (2000:13) は推測している。また服部 (1951:98) は「東京人の中にも『歴史』『ランプ』などの語頭の子音として〔l〕を有するものがある」ことを指摘している。

めて論ずるのが適当であろう。

参考文献

- Crystal, David 1997 *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*. Oxford: BLACKWELL.
- Dubois, J., Giacomo, M., Guespin, L., Marcellesi, C., Marcellesi, J.-B., Mevel, J.-P. 1973 *Dictionnaire de Linguistique*. Paris : Librairie Larousse.
- Blevins, Juliette 2004 *Evolutionary Phonology—The Emergence of Sound Patterns*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bloomfield, Leonard 1933 *Language*. London: GEORGE ALLEN&UNWIN LTD.
- Dauzat, Albert 1944 *Les Èpès de la langue française*, Collection 《Que sais—je?》, Paris : Presses Universitaires de France. 川本訳 1954 「フランス語の歩み」白水社
- 服部四郎 1951 「音声学」 岩波書店
- Hayata, Teruhiro 2000 *The Liquid and Stem-final Vowel Alternations of Verbs in Ancient Japanese*. Gengo Kenkyu 118.
- Jakobson, Roman 1973 *Essais de Linguistique Générale*. Paris :Les Éditions de Minuit.
- 亀井孝 1973 「日本語系統論の問題」 亀井孝論文集 2 吉川弘文館
- Ladefoged, Peter 2001 *Vowels and Consonants*. Malden, Massachusetts: Blackwell Publishers Inc.
- 1993 *A Course in Phonetics*. Orlando, Florida: Hartcourt Brace&Company. 竹林・牧野訳1999 「音声学概説」大修館書店
- Maddieson, Ian 1984 *Patterns of Sound*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Malmberg, Bertil 1958 *La Phonétique*. Paris: Collection 《Que sais—je ?》 Paris : Presses Universitaires de France. 大橋訳 1959 「音声学」白水社
- 松本克己 1998 「流音のタイプとその地理的分布—日本語ラ行子音の人類言語学史的背景—」『一般言語学論叢』第一号、筑波一般言語学研究会
- 三雲昂 1996 「LとR—この混乱は日本人だけの問題か」 国士舘大学教養論集
- Saussure, Ferdinand de 1878 *Mémoire sur le système des voyelles dans les langues indo-européennes*. 1970 *Recueil des Publications scientifiques de Ferdinand de Saussure*. Genève : Slatkine Reprints
- 城田俊 2002 「日本語の音—音声学と音韻論」 ひつじ書房
- Stockwell, Robert P. 1960 *The place of intonation in a generative grammar of English*. *Language* 36: 360-67
- 高橋直彦 2002 「弾音の生起環境」 東北学院大学 英語英文学研究所紀要第29号
- 田中美輝夫 1970 「英語アルファベット発達史—文字と音価—」 開文社
- Ueda, Isao and Stuart Davis 2001 *The acquisition of Japanese “r”*. Gengo Kenkyu 119.